言語学覚え書き
－わが言語体験の記録－

河野庸二

はじめに

筆者もいよいよ退官の時期を迎えることになった。「山口大学英語と英米文学」には20年間にわたりお世話になってきたわけである。今回は特にそういう事情もあるので、これまでに掲載させていただいたものとは少しばかり趣向を変えて、従来あまり取り上げなかった言語体験のいくつかを回想的に綴らせてもらうことにした。そうなると当然話題が英語からはずれて、むしろ国語寄りになってしまいそうになることもある。しかしそれは筆者の関心がそちらにも向いているためであって、英語学的教養に端を発した国語論と理解していただければ幸せである。サブタイトルの「－わが言語体験の記録－」はいくぶん物々しいが、実際はことばに関する短いエッセイを順序不同に集めたものに過ぎない。日頃忘れていることのなかにも、時たま思い出せば書き留めておきたいと思うことは少なくないわけで、それを忘れないうちにメモしておいて、のちに清書するのは覚え書きをつくる一つの方法であろう。以下の各章は筆者の書斎における体験のみならず、日常生活上の体験、さらには筆者にとってはいわばフィールドワークに相当する海外渡航の機会に得た体験の数々をも含めて、折にふれて綴ったものの収録である。

立席特急券

立席特急券なるものの存在を知ったのは、JRがまだ国鉄といっていた時代である。筆者の場合もっぱら朝寝坊をしたときに乗車駅である防府から宇部までの区間を年間平均数回利用している。この切符はいわゆる緑の窓口で買うのだが、駅員の応対がふるっていた。こちらが「立ち席特急券をください」というと「はい、りっ席特急券ですね。」と言い直す。そうか、音読みが正しいのかと思って次回から音読にすると今度は「はい、立ち席特急券」と言い直される。そんなことが何度かあった。結局今では、「JRは文部省ではない。要するにJRは＜立席特急券＞という制度を設けているのであって、その読み方はどちらとも決めてないのだ。」と一人合点している。ところでこの立席特急券をよく見ると、「立席特急券では着席できません。」と明記し

てある。ところが実際には乗客はどこかに空席を見つけて当然の権利であるかのように堂々と着席する。検札に来た車掌もそれを容認するばかりか、「ありがとうございます。」と礼までいう。そもそも立席特急券は夜行列車が朝を迎えて、乗客の一部がすでに下車していくつかの空席ができる時間帯の停車駅でのみ発売されているものなのである。それならなぜ実情に即して「立席特急券では空席にしか着席できません。」と書かないのか。日本人の心情として、寝台車の場合、まさか乗客が寝具を畳んだあとにできたスペースにまで割り込んでいくことはいささか行き過ぎであろう。結局立席特急券で乗車した客は、できれば空席のままで使われなかった席に坐ろうとし、万一それが見当たらなければ、やむをえず、すでに乗客が下車して、なるべく相客のいないスペースを探すことになる。ちなみに劇場にもやはり「立ち見席」というものがあってこの場合は文字どおり着席できないはずである。結局立席特急券は「立席」とうたっている以上「着席できません」と書かざるをえなかったのであろう。そして実はそうではないのだという細部の説明は一切なしに、乗客の暗黙のうちの了解を期待しているのである。そういうところがいかにも日本的発想といえないだろうか。

人を恋ふる歌

「妻をめとらば才たけて」という歌いだしの、与謝野鉄幹作「人を恋ふる歌」はかつて学生の宴席などで愛唱された歌である。ところがこの歌の第四連の冒頭「ああわれコレッジの奇才なく」は筆者の知る限り原作どおりに歌われることは一度もなかった。いつも決まって「ああわれダンテの奇才なく」と歌いはじめてから「バイロン、ハイネの熱なきも」と歌いつづけるのであった。しかし意味を考えるとそれではいかにも不自然なのである。なぜならダンテはたしかに「詩聖」と呼ばれるにふさわしい人ではあるが、「奇才」を持ち合わせていたとは考えられない。「奇才」の持ち主はやはり鉄幹が「コレッジ」と表記したイギリスロマン派のコールリッジ（「老水夫行」や「クリスタベル」の作者）でなくてはならない。その「コールリッジ」がいつしか「ダンテ」にとって代わられたのは一つには知名度の低さのためで、今ひとつは語呂がよくないためであろう。皮肉なことには、「コレッジ」をカットして代わりに「ダンテ」を登場させたことによって、時代の幅が大きく広がり、同時に、少なくとも知名度の点では超一流の伊、英、独の詩人が出揃うかたちになり、この歌の歌詞は国際性を一段と増大させることになった。

これに似た現象が童謡、唱歌の世界にも見られることはいうまでもない。青木存義作詞、梁田貞作曲の「どんぐりころころ」は大正十年（1921）の作ながら一向に古さを感じさせない佳曲であるが、この歌も往々にして原作の歌詞を少し改作して歌われる。つまり一番の一節を子供たちはたいてい「どんぐりころころどんぐりこ」と歌っているようだ。正しくは「どんぶりこ」で、山から転がってきたドングリが池にはまるときの音を表わす擬声語なのだが、子供たちはそんなこととはつゆ知らず、うたい出しの「どんぐり」の牽引により直観的に「どんぐりこ」と歌ってしまうのである。理屈からすると「どんぐりこ」では意味をなさないのだが、口調からいえばそのほうがかえって自然といえるかも知れない。子供が歌の歌詞を取り違えて解釈することは誰もが経験することではなかろうか。故向田邦子はある随筆のなかで、子供時代「荒城の月」の一節「巡る盃」を「眠る盃」だと思い込んでいたと書いている。筆者の場合たとえば少年時代に聞き覚えた「里の秋」の一節「栗の実煮てます（囲炉裏端）」を「栗の実見てます」だとつい最近まで信じて疑わなかった。

また、メロディーと歌詞の問題に関連しては、金田一春彦氏がその著書『日本語』のなかで次のように述べている。

> …また、日本語の歌を作曲する場合、リズムのとり方には何の拘束もないが、歌詞のアクセントに注意してメロディーをつけないと、意味がとりにくかったり、まちがえてとられたりする。
>
> 戦争中、ラジオを聞いていたら、「歌で山路の…」という歌が聞こえてきた。この時勢に珍しくのどかなことだと思っていたら、「討たで止まじの…」という歌詞なのを、ウタデヤマジノと作曲されていることから聞きまちがえたことを知った。いつか雑誌『キング』に、市河三喜博士夫人が子供のころの思い出を書いていたが、「海のあなたにウスガスム山は上総（かずさ）か房州か」という鉄道唱歌の一節を、房総半島の山にはウスという怪物（？）が住んでいるのかとおもったという。これはそこにウスガスムというフシがついているためにちがいない。[1]

しかし何といっても一番の傑作は明治44年（1911）初出の文部省唱歌「浦島太郎」の第四連の冒頭「帰ってみればこは如何（いか）に」のコワイカニが、音符どおりに歌うと「怖い蟹」になってしまうというケースであろう。考えてみると、「昔々浦島は」ではじまるこの唱歌の歌詞は現代っ子に歌わ

れてもさほど違和感がないであろうが、「これはどうしたこと」を意味する「こは如何（いか）に」という部分だけはなんとも古色蒼然としている。それがいっそう意味のとりちがいのされやすさに拍車をかけているのである。

好きな作家

海外研修の引率者としてのテネシー州立大学マーティン校滞在を終え、同大学国際企画部の主だったスタッフに見送られてメンフィス国際空港内のマクドナルドで昼食をとりながらゲートインの時間待ちをしていたときの歓談のなかで、話題が毎年夏に医療短大で開催している公開講座のことに及び、今年はどの作家を取り上げるのかという話になった。そうこうするうちに主任のサンドラ・ベイカー女史から "Who is your favorite author?" と尋ねられた。とっさのことで当惑したが、まず "There are many." と答えてから、なおも考えがまとまらないままに、 "For instance, I like Romantic poets and Yeats." といい、さらに付け足して "And I am an admirer of Hans Christian Andersen." と答えた。アンデルセンが常に念頭を離れぬ作家であることは事実である。一番はじめに Romantic poets が出たのは、帰国すればすぐに九重でのイギリスロマン派文学研究会合宿勉強会に参加することが気になっていたからである。イェーツの名が出たのは先年この研究会で若き日のイェーツについて研究発表をしたことがあったためである。とにかく好きな作家が多いことは先方にわかってもらえたはずであるが、後になってあのときなぜ「チェホフ」が思い浮かばなかったのかと大いに悔やまれた。チェホフは筆者が学生時代から私淑してきた作家である。かつて山口の米屋町にあった古本屋第三書房でコンスタンス・ガーネット訳の分厚い一冊本の英訳チェホフ選集を手に入れたのがきっかけであった。しかし実際はそんなものなのだ。自分の最も崇敬する文人、芸術家、学者といえども常に念頭にあるとは限らない。それと同様に、外国での貴重な体験の数々を積んでいても、念頭にあるのは比較的最近の出来事か、さもなくば、よほど強烈な印象を留めている事件か、そのいずれかであろう。何かの拍子に時たま記憶の底から浮かび上がってくる思い出は書き留めておかねば、すぐに念頭から離れてしまう。備忘録の大切さを痛感させられるのはそんなときである。

南カリフォルニアの夾竹桃

私にとって2度目の海外渡航のとき、つまり1988年夏に関西、関東の男女高校生の引率を依頼されて南カリフォルニア、サンディエゴの近郊ビスタの地に私自身ホームステイを体験したときのことである。生徒たちに英語を教えた二人の先生のうちの一人シンディー・バーガーと歩いていて広い街路の脇におそらくサウンドバリヤーとして植えてある夾竹桃について尋ねてみた。夏だから木にはもちろん花が咲いていた。“What do you call those trees in English?” この問いに対してシンディーはこう答えた。“Orientals. So they may have come from your country.”（不思議なことに彼女は「オリエンタルズ」と最初の音節にアクセントを置いて発音した。）その後何年もたってから、たまたま英和辞典をひいていて正しくはoleanderが「夾竹桃」に当たる単語であることを知った。たしかにOrientalに似ている。とすればシンディーはこの木の名前を誤って覚えていたことになる。しかし、似てはいるものの両者にはlとrのつづりの違いがある。ドイツ語にもlang l、kurz r（ラング エル、クルツ エル）つまり「字体の長いエル、字体の短いエル」という言い方があるという。とすれば洋の東西を問わず、rとlの発音の区別は難しいに違いないのであり、それが不得意なのはひとり日本人ばかりではないのである。アメリカ人でも間違えることを思い知らされた。

DavidとJonathan

やはり南カリフォルニアのビスタにホームステイしていたとき、もう一人の英語の先生ミッキーにもいろいろとお世話になった。彼女は大柄な女性で本職は小学校の教師、家を離れて就学中の娘の他にいたずら盛りの小学生の息子デイヴィッドがいた。ところが彼女にはもう一人、息子と同年輩の養子ジョナサンがいたのである。ジョナサンは韓国の孤児院からもらってきたのだそうで当然韓国系であり、南カリフォルニアの太陽で真っ黒に日焼けしていた。日本の場合と違って、実子があっても養子をする習慣が著しかった。それに郊外という言葉がぴったり当てはまる当地では、今でもchurch goingがさかんである。日曜ともなれば住民は皆それぞれの宗派に従って、自分の所属する教会にでかけていく。近所付き合いよりもむしろ日曜ごとの教会での出会いが住民にとってかかせない社交の機会なのだと痛感した。そんな生

活環境の中でミッキーの家にも、旧約聖書の記述にあるとおり、デイヴィッドとその親友のジョナサンがいたわけである。

And it came to pass, when he had made an end of speaking unto Saul, that the soul of Jonathan was knit with the soul of David, and Jonathan loved him as his own soul.

2 And Saul took him that day, and would not let him go no more home to his father's house.

3 Then Jonathan and David made a covenant, because he loved him as his own soul.

4 Then Jonathan stripped himself of the robe that was upon him, and gave it to David, and his garments, even to his sword, and to his bow, and to his girdle. [2]

Namesake

ウラジーミル・ナボコフの短編集を読んでいて、「わたしには同名の人が2人いる。」ではじまる作品に出会ったことがきっかけで筆者は namesake という単語を意識しておぼえた。日常語でない単語を記憶するには何らかの工夫が必要だ。それから数年後に思いがけなくこのささやかな知識が役立つときがきた。1999年夏、例の海外研修引率で米国テネシー州立大学マーティン校滞在中の出来事である。学長主催の昼食会の席上で、隣のテーブルのフランク・リーチ先生がしきりに私を呼ぶので、立ち上がって近寄ってみると、どうやら彼は学生たちに自分が名付け親になってやった人のことを説明しようとしていたらしく、"What do you call namesake in Japanese?" とたずねるので、このときとばかり、「同じ名前の人、同名の人」と答えた。その一言で学生たちにもリーチさんの話が理解できたようであった。ところがこのフランク・リーチ先生を交えた別の場で、もう一度この単語を活用する機会に恵まれたのである。前に書いたとおり、メンフィス空港内のマクドナルドでの歓談のなかで、筆者が主催校の責任者となって帰国後開催する予定の英米文学の公開講座の話をしたら、国際企画部主任サンドラ・ベイカーが「今年は誰をとりあげるのか」と聞いたので、先日の昼食会でのやりとりがまだ頭に残っていたせいもあって、"Frank's namesake. Frank O'Connor." と答えることができた。サンドラは "Oh!" といってうなずいていたが、ミ

スター・フランク・リーチはそばでにっこりした。リーチさんとは依然として“Mr. Leach.”と呼びかける間柄だったが、これを機会にさらに“Frank.”とアドレスできそうな気がした。筆者は後日この話を教室で学生たちに教訓として披露したのである。つまりナボコフの作中の一単語が意外な場面で大いに役立った事例を示すことにより、自分の専門分野とは直接関係のないものを不用とする短絡的態度をいましめるための教訓としたのである。

Doggybag

1999年夏テネシー州マーティンでの研修を終えて、われわれの一行はロサンゼルスの郊外オレンジカウンティのホテルに投宿した。ホテルに2泊する間の丸1日を自由行動にして、学生たちにディズニーランドを満喫させようという意図なのである。筆者自身は早めにディズニーランド見学を終え、ホテルに戻った。これまでfast foodに近いバッフェがつづいたので、せめてアメリカ滞在最後の夜ぐらいはちゃんとしたディナーを食べようと思って、独りでホテルのレストランに行ってサーモンとシーザーサラダを注文した。きわめて愛想のいい美人のウエイトレスが何度もやってきてはにこやかに“Is everything OK?”とたずねる。ところで料理が届いてみると、分厚いサーモンもさることながら、シーザーサラダのボリュウムには参ってしまった。ドギーバッグの存在は知っているものの、まさかこんなエレガントな食堂で“A doggybag, please.”は場違いな表現ではあるまいかとためらっていたところへ彼女がきた。当たって砕けろとばかり思い切って“The Cesar salad is very delicious, but I'm afraid I can't eat it all now.”とまでいうと、先方が気を利かせて、“Shall I bring a container for you? ”といった。なるほどこういう表現の仕方があったのかと思い知らされ、また恥ずかしい思いをしなくてすんだ。少し多めにチップを置き、料理は結局彼女の持ってきてくれた発泡スチロール製のコンテイナーに残りを全部入れて部屋に持ち帰り、出発の日の朝食にした。

Minneapolis

アメリカ行きはこれまでで通算9回になるが、筆者は決してアメリカ通とはいえない。なにしろ初の海外渡航のときすでに50代に達していたのである。だからいまだにこんな失敗をすることがある。ノースウエスト航空で関西空

港を発ってメンフィスに向かうときミネアポリスを経由することになる。一昨年の夏、乱気流のためその飛行機が揺れに揺れた。スチュアデスが飲物をサービスするのを中止したほどである。たまたま筆者はやはり日本からの、こちらは高校生の引率と思われる先生と隣り合わせていた。話しかけたかったがなかなかきっかけがつかめなかったのである。このときとばかり「さっきはだいぶ揺れましたね。」から始めて、相手が大阪の工業高校でカナダへ行くのだということもわかった。次々に話がはずみ、そのうち相手から「ところでミネアポリスは何州でしたかね。」と尋ねられた。とっさのことで筆者のほうも「さあ、どうでしたかね。スチュアデスに聞いてみましょうか。」というわけで、通りかかったスチュアデスに、"One question. What state does Minneapolis belong to?" とたずねると彼女はこともなげに "Minnesota." と答えた。そうか、これは愚問だった。Minneapolis の Minne は Minnesota を表わし、つぎの a は連結母音、polis はいうまでもなくギリシャ語由来で「都市国家」の「ポリス」、つまり「ミネソタ州を代表する主要都市」というわけかと思い当たった。ミネアポリスはミシシッピ川をへだてて州都のセントポール（St. Paul）と隣り合っていて、そのため両市は Twin Cities と呼ばれている。大リーグのミネソタ・トゥインズ（Minnesota Twins)というチーム名の由来であることも併せて思い出した。海外渡航ではこのような思いがけない失敗と収穫が同時に起こりうるのである。

Der grüne Heinrich

poliglot（多言語に通じた人）の最たるものと称されるべき碩学 Mario Pei でさえ、意外に弱点をさらけ出す場合が時たまある。一例をあげると、ペイ教授の数ある著作の一つである *What's in a Word* の第 3 章は The Language of Colors Is Not International（色を表わす言葉は世界共通ではない）と題するもので、例によって読者の興味をそそる論説がつぎつぎに展開されているが、話題が「黒色」に及ぶ箇所に次のような一節がある。

> The Papal aristocracy is to the Italians the "Black Aristocracy," black being the color normally worn by churchmen. Our police wagon "Black Maria," is in Austria *der grüne Heinrich*, "green Henry" (here there may be reference to the actual color of the vehicle; the shift in gender is interesting. [3]（下線筆者）

ローマ法皇による政治体制はイタリアではBlack Aristocracyという。黒が教会関係者の平素身につける衣服の色だからである。米国のパトカーは「ブラック・マライア」(黒衣のマリア)だが、オーストリアではder grüne Heinrichつまり「グリーン・ヘンリー」である。(この場合実際の車の色をいうのであろうが、それにしても性別が変わるところが興味深い。)

つまりペイ教授は米国とオーストリアのパトカーの呼び名を比較しているのであるが、彼が世界的に知られた19世紀オーストリアの作家ゴットフリート・ケラー Gottfried Keller (1819-1891) の代表作 *Der grüne Heinrich* を知らなかったことは確かである。さもなければ性別の変化はきわめて当然のことだからである。さいわい新版のブリタニカにはごていねいにもこの小説の梗概が載せてあるので、それを読めばこの長編を読んでいない者でも十分に納得できる。

Green Henry (so called because his frugal mother made all his clothes from a single bolt of green cloth) sets out to become an artist. After some success and many disappointments, he returns to his native city and wins some respect and contentment in a modest post as a civil servant. [4]

緑のハインリッヒ(母親が吝嗇で子供の衣服をすべて緑色の布地で作ったためついた呼び名である)は画家を志す。なにがしかの成功と数多くの失望を体験したのち、彼は故郷の市に戻り公務員に収まってある程度の尊敬を集め、満足を見い出す。

思うに碩学マリオ・ペイのこのような「無知」は出版文化の相違に起因するであろう。我が国にはさいわい早くから日本文学全集、世界文学全集の出版がさかんであり、少なくとも筆者の学生時代には、ケラー作の『緑のハインリッヒ』は当時広く流布している世界文学全集の一巻をなしていた。もっとも筆者は読んだわけではない。それどころか作品の内容を知らないまま「緑の」という修飾語がついているからには、この場合の「ハインリッヒ」は人名ではなく地名にちがいないと長い間独り合点していたのである。

橋の論理

昨年（1998年）早々、かつての同僚で3年先輩の北九州工業高等専門学校名誉教授、大分県中津市在住の秋吉稔先生から電話を受けた。《美濃部都政の頃取り沙汰された「一人でも反対する者があれば橋をかけるわけにはいかない。歩いて川を渡らねばならない」という言葉、いわゆる「橋の論理」の出典がわからないか。》という問い合わせの電話だった。世界情勢や政界の動きに敏感で、いうなれば新聞の政治面に関心の深い秋吉氏らしい質問だった。「手を尽くして調べてみましょう。」と一応請け合ったものの、大学附属図書館、宇部市立図書館等で可能なかぎり文献に当たり、人にも尋ねてみたがいっこうに埒があかない。そのうちとうとう夏になって、例年のごとく筆者は学生の海外研修引率で渡米した。研修プログラムのなかのフィールドトリップでメンフィスに行ったとき、既述のフランク・リーチさんから老舗の書店で、近辺では最大の店鋪を誇るJones & Nobleの存在を教えられた。学生たちが自由行動でモールでのショッピングを楽しんでいる間、筆者は早速その書店を訪れた。聞きしにたがわず書店としては最大級のスケールだった。一階建てで広々としたスペースの中央には、一段高く喫茶コーナーまで設けてある。おもむろに店内を散策しながら、それとなく書架を物色しているうちに、リーダーズダイジェスト社から出ている *Quotable Quotes* という小ぶりな本が目にとまった。いわゆる名句集である。そういえばたしかリーダーズダイジェストには寸言のコラムがあったことを思い出した。これはそれらを一冊にまとめたものなのだ。もしやと思い、立ち読みで索引のbridgesの項をのぞいてみると、5項目ある。一つ一つ当たっているうちに思わず胸のときめきをおぼえた。第六感にひらめくものがあったのである。

> He who cannot forgive others destroys the bridge over which he himself must pass.
>
> —GEORGE HERBERT [5]
>
> 他人を許すことのできない者は自分が渡らなくてはならない橋を破壊する。
>
> —ジョージ・ハーバート

きわめて短くなってはいるものの、内容はまぎれもなく秋吉氏の求める「橋の論理」に一致する。旧同僚からの依頼でもあり、日本でどんなに手を尽く

しても調べようがなかった事項だけにうれしさはひとしおだった。3週間以上にわたる引率を終えて帰国し、我が家に帰りついたのは深夜であったが、翌朝まで待ちきれず秋吉先生宅に電話した。同先生に喜ばれたのはいうまでもない。

una casita（ウナ　カシータ）

海外研修では受け入れ校が国際企画部だけあってさすがに国際交流の場が多い。現地スタッフの自宅でのパーティーの席でベネズエラ出身の留学生の一青年と出会ったことがある。彼が "I'm hungry." を日本語で何というかと尋ねるので、口語調で「お腹空いた」だと教えると、にやりとして「実はスペイン語にもそれと同じ表現がある。」といった。何のことかと思ったら、una casita だといったので笑ってしまった。una は英語の a に相当する冠詞 uno の女性形である。-ita は指小辞であるから una casita は「(一軒の)小さな家」の意味だ。発音すると「お腹空いた」という日本語と酷似しているというのである。どうやら彼はテネシー州立大学マーティン校の数ある日本人留学生との交流のなかでこの偶然に気づいたらしかった。ラテンアメリカ出身のこの青年がメキシコの作曲家アグスティン・ララを知っているかどうか尋ねてみると、彼は「知らない」と答えた。それでもあきらめずに「それでは "Solamente una vez"（「ただ一度だけ」）という歌は知っているかと聞くと、「それなら知っている。」と答えた。数々の名歌の作者アグスティン・ララは知らなくても、その代表作の一つをラテンのヒットナンバーとして知っていたのである。

肝心のアメリカの学生との交流も、同様なパーティーその他で体験できることはいうまでもない。別の機会にはアメリカのティーンエイジャーから、「日本にはアルファベットが2種類あるんですってね。」と聞かれたこともある。いうまでもなく平仮名、片仮名のことをいったのである。南カリフォルニアのホテルのプールで泳いでいたとき、泊まり客の一人であるアメリカ人の少年から "Are you Chinese? " と聞かれたこともある。「日本人だ」と答えると少年は礼儀正しく「失礼しました。」といい、「僕にはどうも日本人と中国人の区別がつきません。」と正直に告白した。「それが当然だ。日本人と中国人はともにアジア人だから事実上同じなんだから。」と答えると、ひどく感心した様子だった。よせばいいのに彼は、早速プールサイドにいる両親に「日本人も中国人も同じなんだって。」と教えていた。

豊浦（とよら）高校校歌について

山口県立豊浦高校の校歌にはちょっとした因縁がある。筆者が新任以来6年間在職した佐波高校から豊浦高校への転任が決まったときだったと思う。先輩格の同僚である久和彦衛先生（防府市の電器店老舗久和勘《くわかん》の社長の実弟で当時佐波高校英語科主任）から、卒業まではいなかったが、自分は戦前の旧制豊浦中学に学んだことがあると聞かされた。そのとき先生は思いがけなく豊浦の校歌の一節を口ずさんでみせた。記憶は定かではないが、豊浦在校当時先生はなんらかの縁故で、名刹功山寺の住職のもとで修業をしていたというのではなかったろうか。とにかく「乃木大将の生（あ）れにしところ」という歌いだしの一節は同先生から聞かされたのが最初だったと記憶する。久和先生がわざわざ歌ってみせたこと自体珍しいことだが、今にして思えば先生もよほどこの校歌が気に入っていたのであろう。ついでながらいうと、長府は乃木大将の生誕地ではない。生誕地は江戸で、長府は幼少時を過ごした土地である。

ところで実際に豊浦高校に赴任してみるとやがて、この校歌の一番の歌詞はもはや歌われていないことがわかった。長府が生んだ代表的な2人の「偉人」を詠み込んだ歌詞がいわゆる「英雄讃美」につながるため、戦後の民主主義教育上ふさわしくないと考えられたからに相違ない。結局2番と3番だけが校歌として歌われているわけであるが、それでも不思議に違和感がない。つまり「この櫛崎に四王司山（しおうじさん）に」という歌詞は現代の校歌の冒頭の一節としてきわめて自然であり、長さにしても今の時代には1番と2番とで十分なのである。ところがおもしろいことに毎年盛大に開催される同窓会の席ではかつての1番も復元して歌われていることがわかった。いうまでもなく同窓会は主として何十年も前の卒業生が再会を果たす機会であるから、豊浦のような歴史のある学校の場合はなおさらである。同窓会の席で、廃止になった1番の歌詞を復元して歌う習わしははきわめて自然なことといえる。ところでこの校歌は歌詞もよくできているし、曲もきわめてすぐれているのであるが、それもそのはず、作詞は「兎追ひしかの山」ではじまる歌詞で人口に膾炙する「ふるさと」等、多くの文部省唱歌で名高い高野辰之、片や作曲は「海ゆかば」の信時潔である。校歌を制定するに当たって、旧制豊浦中学は当時としては全国レベルで超一流の人たちに作詞、作曲を依頼したわけである。だから豊浦の校歌は当然愛されてしかるべき歌なのだ。第一歌詞と旋律とがぴったり合っている感じで、行進曲風で勇ましく、応援歌と

してもうってつけの曲である。ブラスバンドの伴奏で歌われることが多く、そのときには現在の１番と２番との間にかなり長い間奏が入るが、誰が作ったにせよこれも実際よくできた間奏で、中間部で曲をいっそう盛り上げる効果を発揮している。そんなふうにいえばいいとこずくめで欠陥がないように聞こえるが、信時のこの曲にも欠点がないわけではない。たとえば旧１番の「剣（つるぎ）に筆に偉人を出（いだ）す」の一節は節をつけて歌うと「偉人追い出す」になってしまう。しかしこれはすでに述べたとおり日本の唱歌にはよくあることである。

それはさておき、先日（平成11年９月５日）近年の同窓会会場となっている下関の海峡メッセで開催された第100回同窓会総会の席ではじめと終わりに全員起立で斉唱した豊浦高校校歌はいうまでもなく旧１番の歌詞を復元したものであったが、会場の大画面に写し出されたその歌詞を見て筆者はあっけにとられた。問題は冒頭の「乃木大将の生れにしところ／狩野芳崖生れしところ」の部分の送り仮名である。原作が「生（あ）れにし」とあるのを勘違いしたらしく「生まれにし」にしてしまっていた。（当然後半も「生まれし」になっていたが、それは許せるにしても。）歌詞を見ながら歌った人たちなら、特に戦中までの完全版を歌った世代の人たちなら、誰しも気づいたはずであるが、内心はいざ知らず、誰一人として気づいた気配は示さなかった。いずれにしても、現代人の国語力の低下をまざまざと見せつけられる場面だった。

参 考 書 目

1　金田一春彦、「日本語」、岩波書店
2　*The Holy Bible* (*Authorized King James Version*), Bible House
3　Mario Pei, *What's in a Word,* Hawthorn Books Inc., 1968
4　*Encyclopedia Britannica,* 1986
5　*Quotable Quotes,* The Reader's Digest Associaton, Inc., 1997

A Memoir in Linguistics—The Record of My Linguistic Experiences

Yoji Kawano

Here is a collection of short essays more or less concerning linguistics, especially in the categories of semantics and comparative linguistics. It consists of 12 chapters which are independent from each other. They are entitled respectively: A *Special Express Ticket of JR, Distorted Words* in *Some Japanese Songs, Favorite Authors, Oleanders in Southern California, David and Jonathan, Namesake, Doggybag, Minneapolis, Der grüne Heinrich, The Logics of the Bridge, Una Casita* and *About the Anthem of Toyora High School.*

Most of the individual chapters are, so to speak, part of the author's memoir in linguistics, or the records of the author's linguistic experiences. The following passages are the summery of the abovementioned chapter *Der grüne Heinrich.*

Professor Mario Pei points out that in the U.S. the police wagon is called Black Maria while in Austria it is called der grüne Heinrich and wonders why the gender is changed. It is almost certain that he did not know the world-famous masterpiece of a nineteenth-century Austrian writer Gottfried Keller, *Der der grüne Heinrich.* Otherwise, he would have found the change of gender quite natural.

In Japan, *Der grüne Heinrich* used to be included in a collection of world literature published in 1950's, but few people seem to have read it through. The anthor of this paper himself didn't know how the novel got its title until he obtained a copy of the new edition of *the Encyclopedia Britannica* in 1968.